

帝京科学大学
IR報告書
2020



目次

帝京科学大学 IR 報告書 2020 の発行について	1
帝京科学大学 教学インスティテューショナル・リサーチ室について	2
本学における IR の活用	3
2020 年度の活動について	7
データ編.....	8
データ編の概要.....	8
学科別・学年別 GPA の分析	9
卒業生アンケートデータ分析.....	19
帝京科学大学 教学インスティテューショナル・リサーチ室規程	25

帝京科学大学 IR 報告書 2020 の発行について

昨年度、IR 報告書の第 1 号を発行し、今回で 2 号目となります。経年変化を見ながら、改善に資する分析を行うことを意図して創刊されたものではありませんが、2020 年 2 月より新型コロナウイルスがパンデミックの状態となり、世界的にもあらゆる教育機関が感染抑止のため特別な教育体制を余儀なくされました。昨年度との単純な比較分析を行うことは困難となり、今回各データに関する分析についてもこれを念頭に置いたものとなっています。

大学における IR 活動は、教学マネジメント指針などにも重視され、教育改善のための重要な手がかりとしてさらに機能を高めることが期待されております。しかしながら、PDCA のサイクルを回す改善が平時のものであり、特殊な状況、時代の変転の中にあっては教育研究に対する普遍の基準を持つことの重要性が、パンデミックを契機に認識されてきているのではないのでしょうか。

パンデミック後に全く以前のような環境に戻ることは難しいとも予想されており、地球温暖化など世界的に様々な大きな動きの数々、あるいはテクノロジーの開発により、あるべき大学の像自体がさらに大きく変わっていくものと考えられます。そういった変転の中において、大学における IR 活動は常に自分達の位置を知るためのコンパスとなっていくのではないかと思われれます。

このような認識で、単なる改善にとどまらない普遍的な高等教育を目指す活動の力となるよう、今後、IR 活動に関する改善を加えていきたいと考えております。今後とも IR 活動へのご理解とご協力、ご活用をお願いいたします。

帝京科学大学 教学 IR 室長 内藤可夫

帝京科学大学 教学インスティテューショナル・リサーチ室について

本帝京科学大学 教学インスティテューショナル・リサーチ室（以下、教学 IR 室）は「帝京科学大学教学インスティテューショナル・リサーチ室規程（後掲）」に基づき恒常的に IR を行う組織として設置され、教学 IR 室運営会議（学長、副学長、学長補佐、教務部長、学生部長、学部長、学科長、総合教育センター長、教職センター長、医学教育センター長、事務局長、課長及び東京西事務室長、教学 IR 室員により構成）において活動の協議を行い、具体的 IR 活動に関しては教学 IR 室員からなる教学 IR 室会議において計画の立案と実施、及び検証を行う組織となっております。

自己点検・評価体制の改善整備を行った 2018 年度の規程改定以降、帝京科学大学の質保証体制のための調査とデータ収集の見直しを行い、2018 年度からは専任職員を配置。教学 IR 室会議において体制の整備とデータの収集及び分析手法に関する検討を進めてまいりました。

現下、3 つポリシーの検証に必要なデータの検討、収集の体制の構築過程にあります。さらに、適切な指標、評価法を研究するとともに、データベースの構築を行い、経年変化の検証、分析とこれを通じた IR 活動の有効性の検証、ならびに学内組織とのコミュニケーションを含む教学 IR システムの整備を行うべく、教学 IR 室の活動体制を構築することを目指しております。

教学インスティテューショナル・リサーチ室 室員

室長 内藤可夫 教授

室員 内藤隆宏 講師

高金彰信 係長

鉄井俊宏 主任

本学における IR の活用

教学 IR 室 内藤隆宏

はじめに

本邦の大学においては、2004 年度から 7 年ごとに外部認証機関による評価を受審し、その教育・研究・運営などが適切に実施されているかどうかを確認することが定められている。この外部認証評価は現在 3 期目を迎え、従来の評価方法が変化しており、教育機関は外部からの監査によらず、それを自ら行う内部質保証体制を整備し、継続的に「計画→実行→監査→改善」サイクル（Plan Do Check Action : PDCA サイクル）を常に実施できるか否かが、かかる評価のポイントとして重視されることになった（日本高等教育評価機構 Web）。そして、内部質保証体制において「IR (Institutional Research)」は上述のサイクルにおける監査（Check）を担う部署として、文部科学省の後押しなどもあって設置が進んでいる。

IR 業務の内容

IR が部署としてどのような業務を行うのかについては、各大学の考え方・規模・状況などによって異なるため、大学ごとに IR 部門が所轄・掌握する業務内容は様々である。しかし、教学 IR はいわゆる 3 ポリシー（AP: Admission policy, CP: Curriculum policy, DP: Diploma Policy）の視点をとおして、教育の質保証の評価を行っていくことがその根幹業務にあたる。表 1 に、この 3 ポリシーの評価に用いられることが多いデータを示す（2019, 白鳥）。

清水（2019）の報告によれば、全国の大学における教学 IR において、年 1 回以上分析に用いている項目は次のようなものであった（図 1）。その中から 50% 以上を占めたものは、学生の意識・生活調査（満足度調査等）（64.8%）、成績（GPA 等）（62.3%）、卒業時アンケート調査（56.2%）、新入生アンケート（55.2%）であった（2019, 清水）。

本学においても、教学 IR として学生の意識・生活調査（満足度調査等）、成績（GPA 等）、卒業時アンケート調査などが行われている。加えて、本学には医療系学部をはじめとした資格系学科が設置されていることから、国家試験の対応なども重要な施策である。したがって、国家試験に関連する分析についても着手している。また、専門性の高い学科も多く設置されていることから、今後、資格を活かした就職状況などのデータを加えて分析を深めていくことが望ましいと考えられる。

このように、今後も本学が直面する状況や必要性の観点より、IR において分析の対象となる課題・テーマも随時、設定されていくものとする。

データマネージメント

本学に限った話ではないが、データは各部署にて独立して管理されていることが多く、そもそもどのようなデータがどこに所在しているのか、あるいは所在していないのか、不明であることが多い。部署間を跨ぐデータ利用を行っていくためには、学内のどの部署にどのようなデータが所在しているかを、大学全体のデータマネージメントとして、データ再利用を考慮したデータフォーマットの共通化およびデータカタログの整備と各部署の協力を得て、一元的な管理を行っていくことが望ましいと考えられる。

まとめ

高等教育に期待される役割とともに、大学 IR に求められている役割もまた日々高まりつつある。実際に、私立大学補助金配分基準における教育の質に係る客観的指標による増減率においては、その多くが IR 関連の項目のポイント加算にかかっており、より IR の重要性が高まっていると考えられる（日本私立学校振興・共済事業団，2021）。

また、コロナ禍後の教育においては、LMS などを活用した教育の情報化が進んでいくことが見込まれ、これらの教育手法により得られた教育ビッグデータを活用したラーニングアナリティクス（Learning Analytics）と IR の融合が進んでいくものと考えられる。

本邦の大学等高等教育機関に対しては、機関別認証評価とは別に、専門分野別認証評価なども行われている。本学では専門性の高い教育を行っていることから、これらの専門分野別認証評価の内容も読み解くことが、本学の教育の改善には不可欠であろう。これらの状況を踏まえ、学外の状況や先行事例などを調査しつつ、本学の状況に適合した IR の整備を、引き続き検討していくことが必要である。

文献

1. 日本高等教育評価機構 Web サイト，<https://www.jiheer.or.jp/>（アクセス日：2022 年 2 月 14 日）
2. 白鳥成彦，中退理論と教学 IR データのマッチングによる中退防止の検証，第 8 回 大学情報・機関調査研究会，2019 年 12 月。
3. 清水強志，大学 IR に関する全国調査（2019）の結果報告，第 8 回 大学情報・機関調査研究会，2019 年 12 月。
4. 教育の質に係る客観的指標による増減率、私立大学等経常費補助金取扱要領・私立大学等経常費補助金配分基準、日本私立学校振興・共済事業団、2021 年 6 月

表1 3 ポリシーの評価に係るデータ（白鳥、2019）

	入学前 AP に沿っているか	在学中 CP に沿っているか	卒業時 DP に沿っているか
機関レベル (大学レベル)	各種入学試験 面接志願理由書 資格取得者数 入学時アンケート調査	GPA 修得単位数 学修行動調査 資格取得者数 課外活動状況 退学率	卒業時満足度調査 卒業生インタビュー調査 学位授与数 卒業率 就職率 資格取得者数
教育課程レベル (学部レベル)	各種入学試験 面接志願理由書 入学前教育結果 入学時アンケート調査	GPA 成績分布状況 修得単位数 学修行動調査 資格取得者数 課外活動状況 退学率	卒業時満足度調査 卒業生インタビュー調査 卒業研究 通算 GPA
授業科目レベル		シラバス 成績評価 成績分布状況 授業評価アンケート	

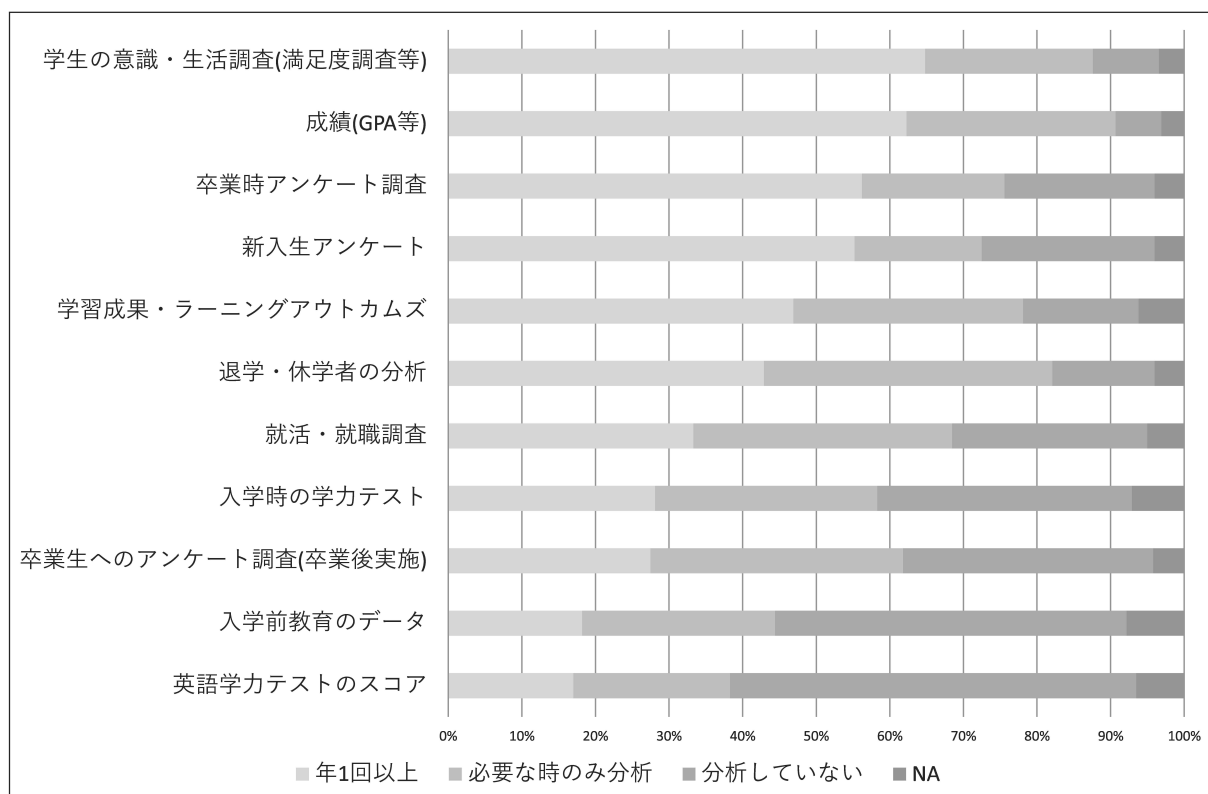


図1 教学 IR の分析状況（清水、2019）

表2 教育の質に係る客観的指標による増減率（日本私立学校振興・共済事業団、2021）

教育の質に係る客観的指標による増減率

私立大学等が行う教育の質に係る客観的指標に応じて、別表2、3、4（別表5による補正後とする）、6、7、及び8により算出した各増減率の合計を、▲9.9%を限度に下記のとおり補正する。

区 分	補 正 方 法
1. 全学的チェック体制	
(1) ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを踏まえた取組の点検・評価	
(2) 全学的な教学マネジメント体制の構築	
(3) IR機能の整備	
(4) 情報の公表 ※アウトカム指標の追加	
2. 教職員の質的向上等体制	
(1) FD組織の設置及び実施	3.9点～4.1点……+5% 3.7点～3.8点……+4%
(2) SDの取組状況	3.5点～3.6点……+3% 3.3点～3.4点……+2%
(3) 教員の教育面における評価制度	2.9点～3.2点……+1% 2.4点～2.8点……0% 1.9点～2.3点……▲1% 1.5点～1.8点……▲2% 1.1点～1.4点……▲3% 0.6点～1.0点……▲4% 0点～0.5点……▲5%
3. カリキュラムマネジメント体制	
(1) 履修系統図の作成またはナンバリングの実施	
(2) GPA制度の導入、活用	
(3) 準備学修に必要な時間等のシラバスへの明記	
(4) 初年次教育の実施	
4. 学生の学び質保証体制	
(1) 学生の学修時間・学修行動の把握	
(2) 学生の学修成果の把握	
(3) 学生による授業評価結果の活用	

2020 年度の活動について

2020 年

令和 2 年度第 1 回教学 IR 室運営会議開催（6 月 23 日）
（新型コロナウイルスの影響によりメール審議）
帝京科学大学教学インスティテューショナル・リサーチ室規程の改定
2020 年度以降活動計画案策定
学籍異動推移分析
『帝京科学大学 IR 報告書 2019』発行

2021 年

令和 2 年度卒業生アンケート実施（3 月 8 日～ 30 日）
令和 2 年度第 2 回教学 IR 室運営会議開催（3 月 24 日）
学年毎 GPA・単位数分析報告
学科・コース別入試区分と GPA、入試区分・GPA 等の分析結果報告

その他

IR 室員外部研修
MJIR2020 第 9 回 大学情報・機関調査研究集会（11 月 24、25 日）
データベース構築作業及び調査
データ分析環境（ソフトウェアなど）調査検討

データ編

データ編の概要

2020年度に収集されたデータのうち、GPAの学科別・学年別統計及び卒業生アンケートの統計データの概要・分析を紹介します。本教学IR室におきましては、GPAに関しては授業科目やその種別、学部、学科、入試形式など多くの属性に関するデータと合わせての分析を試行し、その意味や意義の検証・分析と研究を行っております。ここにその一部としてGPAデータ、卒業生アンケートデータとその分析の概要をご報告します。

4年生のGPAデータについては、学科によるカリキュラムの違いなどがあって分析に馴染まない点があり、今後、カリキュラム改革の進展により4学年並列の分析が有効と判断された際に報告に加える予定です。卒業生アンケートについては、2019年度報告書のデータとの比較において分析しております。

学科別・学年別 GPA の分析

教学 IR 室 内藤可夫

学科別・学年別の GPA のヒストグラムを並べたものが右ページであり、左から 1 年生、2 年生、3 年生となっている。4 年生については、各学科のカリキュラムにより取得単位数や成績評価の仕組みが異なり、経年での学生の傾向の変化の分析が難しいため割愛している。現在、キャップ制による 4 年生までの均等な科目配置に移行中であるが、成績評価についても厳正化及びディプロマポリシーの検証のために必要な策を講じるが必要となってきている。来年度以降、4 年生までの GPA 比較の意義を考慮し、検証方法について工夫をしていくこととしたい。

<全学の傾向>

全学科全てに共通しているのは、GPA の山が例年と比較して右寄りになった（高くなった）ことである。例年に比較して平均して 0.5 高くなっている。中には極端に成績の高い学科、学年も見られる。2020 年は新型コロナウイルスの感染状況によって対面授業が困難となり、各回の課題の提出を以って出席とする科目が多くなった。その課題の提出を点数化して成績評価を行った場合には、純粋な達成度の測定の場合と異なり分布に偏りが現れるものと考えられる。しかしながら、達成度により成績評価することが本来であるため、各回の課題提出と成績評価の切り分けを行うことは重要と考えられる。ただし、文部科学省や大学によって学生の受講環境に留意することが求められていたことも考慮しなければならない。

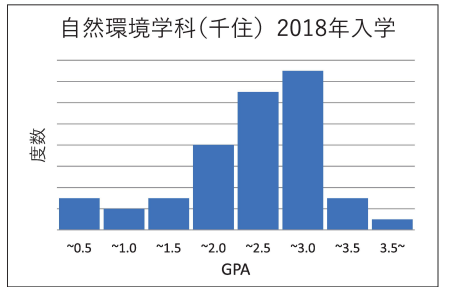
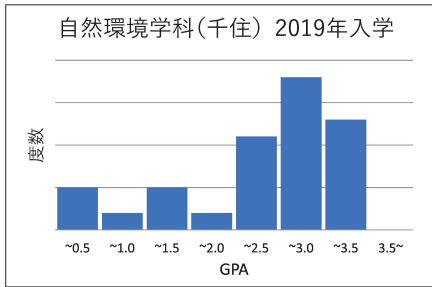
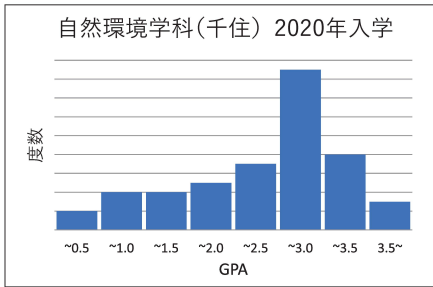
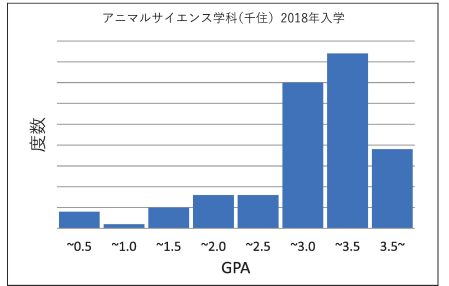
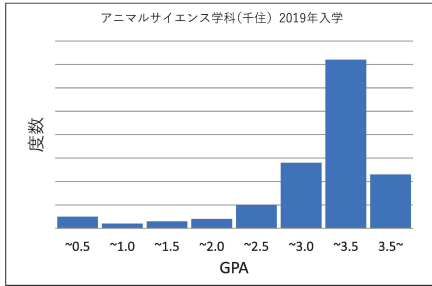
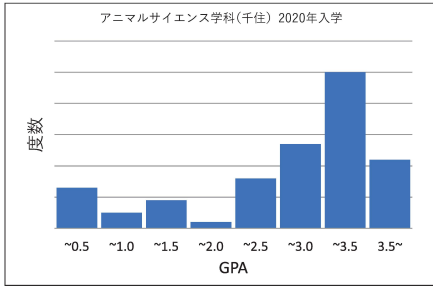
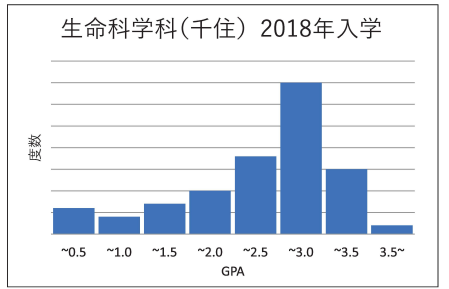
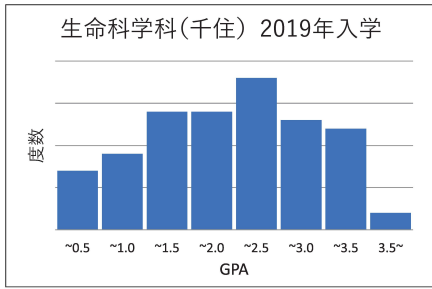
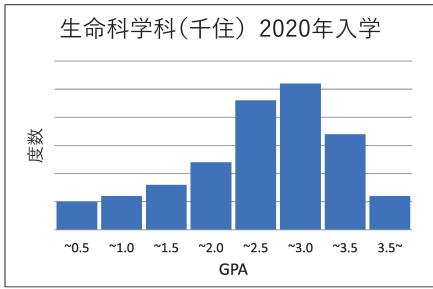
コロナウイルスの流行の影響は、対面授業の減少や実習系授業の授業方法の変更、課外活動やアルバイトの減少、教員とのコミュニケーションの変化など多くあり、それらの影響も小さくないと考えられる。今回のデータ分析については、これらの制約を条件としていることに考慮しつつ、学生の学修に問題が出ていなかったかを検証する点に意義が存するものと考えられる。

右ページは、千住キャンパスの生命環境学部生命科学科、アニマルサイエンス学科、自然環境学科の GPA 分布のヒストグラムである。

生命科学科については、両キャンパスとも全学の傾向と異なり成績が全体に広く分布している。これは上に述べた全体の傾向、すなわち課題中心の成績評価ではなく、達成度に関する評価が多く行われたことが理由の一つと考えられる。ただし、2019 年入学（2 年生）については 0.5 以下が多く見られることから、多くの科目を受講放棄した学生が少なからず存在したことが想定される。次年度以降、GPA の特に低い学生（取得単位の少ない学生）への対応に工夫を行う必要がある。生命科学科（千住）の 3 年生については全学の傾向と大きな違いはない。

アニマルサイエンス学科（千住）については、好成绩の学生が顕著に多くなっていることが認められる。GPA3.5 未満はほぼ秀（4）及び優（3）ということになる。GPA3.5 以上は半数以上が秀、残りが優ということになるが、成績評価に少なからず問題があることが考えられる。受講環境への配慮は重要であるが、達成度の測定についての工夫が必要と考えられる。

自然環境学科（千住）については、概ね大学の平均に近いものと考えられるが、上の 2 学科とともに GPA0.5 以下が少なからず存在しており、遠隔授業を原因として受講放棄を行っているとも推測される。非対面授業の学修の管理方法には、通常の対面授業とは違う特別の工夫が必要とも考えられる。

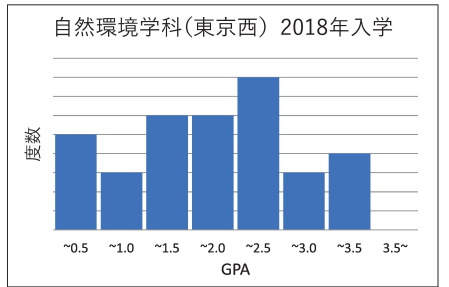
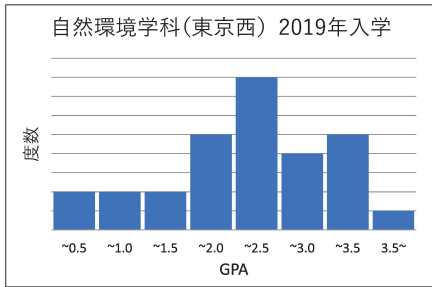
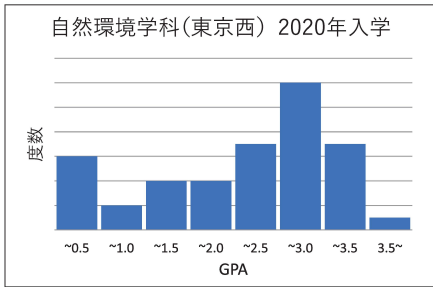
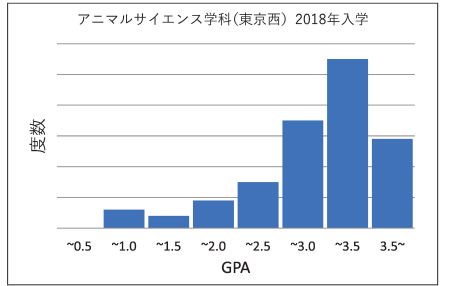
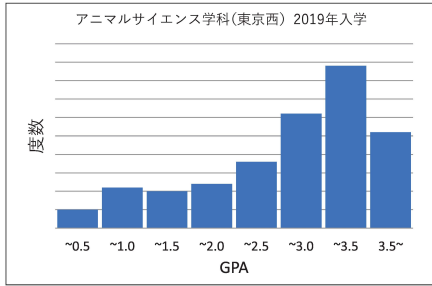
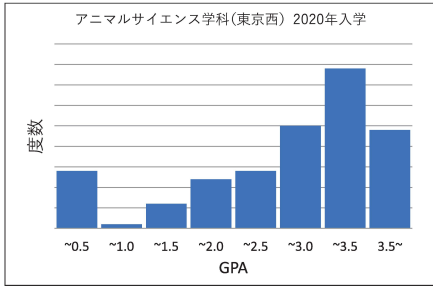
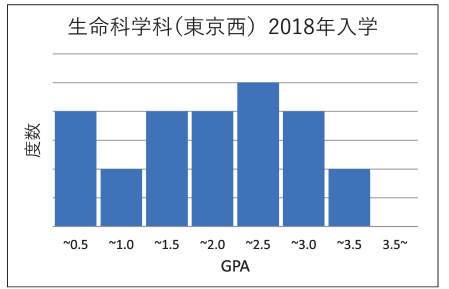
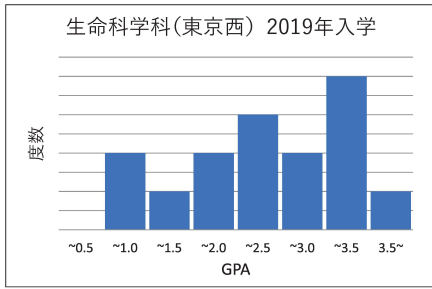
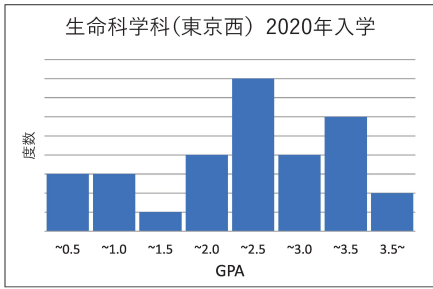


次に 12 ページの 3 学科についてであるが、生命科学科（東京西）については、前の生命科学科（千住）と同様に GPA が分散している傾向が見られる。達成度の違いからの分散という点では評価し得るが、1.0 ないしは 0.5 以下の学生が少なくなく、対面による直接指導の不足が影響した可能性も否定できない。

アニマルサイエンス学科（東京西）の学生については、ピークが 3.5 以下になっており、かなり成績が高くなっている点は問題を見出し得る。ただし、成績は分散しており、達成度による成績評価が行われた結果と考えることができる。

自然環境学科（東京西）については、成績が分散し、ピークも極端に高い位置にないことは評価し得るが、0.5 以下の学生（履修放棄の学生）が少なからず存在することについては問題である。遠隔授業への適応に問題があった可能性が考えられる。

GPA は単位を最低点（60～69）で取得できれば最低の 1 となるが、他に授業を履修放棄していれば分母を増やすことになり 1 以下になる。1 以下の GPA については、ただ単に成績が低だけでなく多くの科目を履修放棄していることの徴標となる。その他、授業放棄に至らずとも成績の低い学生が多いことにも注意すべきだろう。多くが履修放棄の科目の影響と考えられるが、他学科と比較して多くなっている。成績については学生の自己責任と考える傾向が表れているとも考えられるが、カリキュラムシステムにおける各授業の順次性に鑑みれば、最低限の学修の確保のための指導の工夫を検討する必要がある。



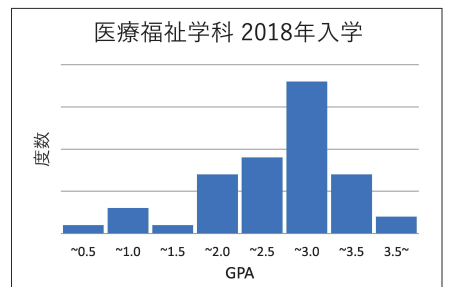
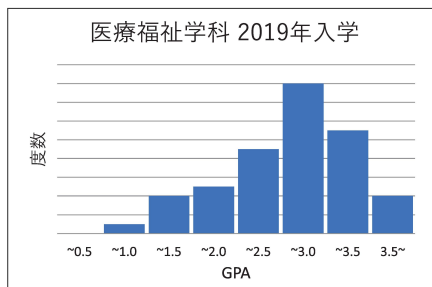
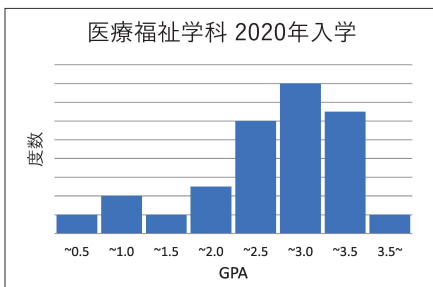
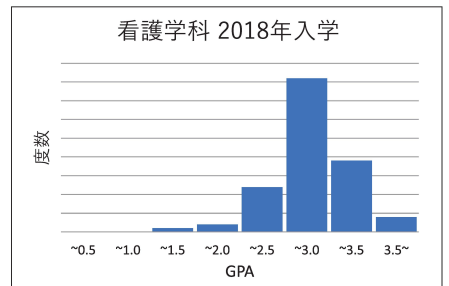
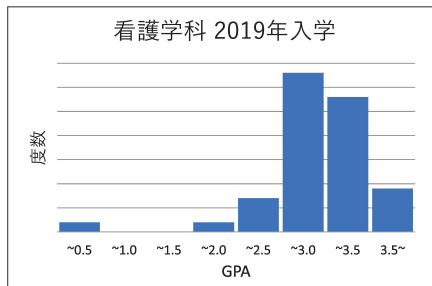
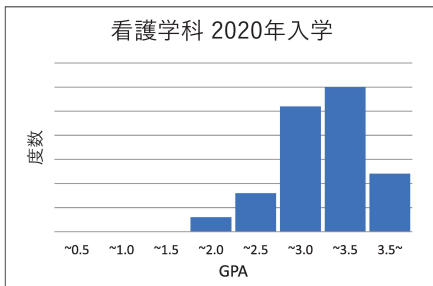
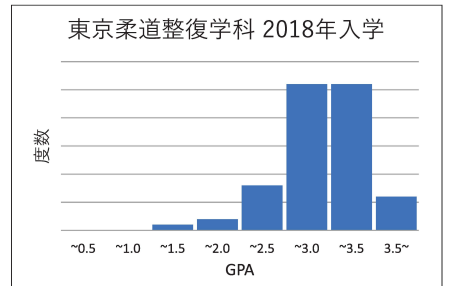
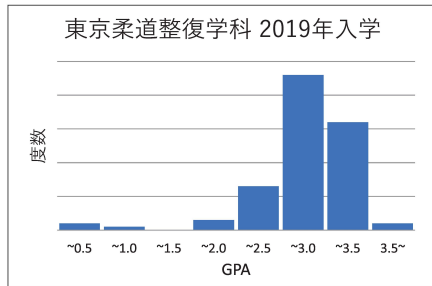
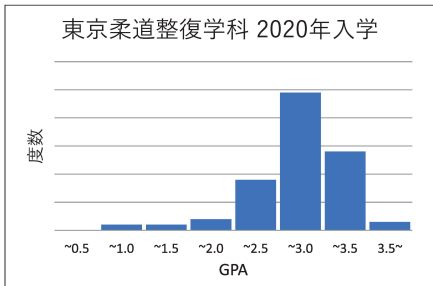
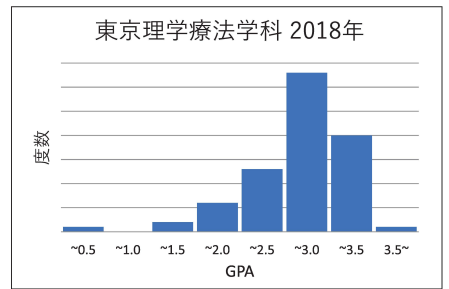
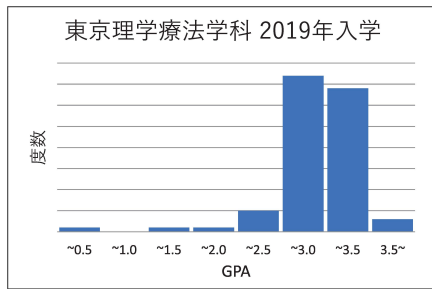
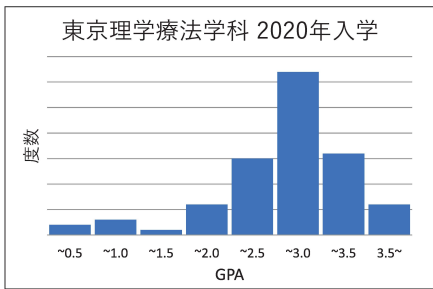
14 ページ、16 ページは医療科学部の各学科の GPA ヒストグラムである。

全般に全学の傾向性と大きく異なることはないが、特殊な分布となっている学科も存在しており、問題点について検証する必要があるだろう。

東京理学療法学科については、2019 年度（2 年生）の成績がほとんど 3.0 以下と 3.5 以下だけになっていることが特徴的となっている。達成度についての適切な評価を行うことができなかったということでもあるが、ドロップアウトが極めて少なかったということでもある。

東京柔道整復学科については、全学の傾向そのままであり特別な特徴を見つけることはできない。強いて言うなら、授業放棄により低い GPA となった学生が少なかったという点を指摘できる。看護学科も東京柔道整復学科とヒストグラムの形がほぼ同じ形になっている。

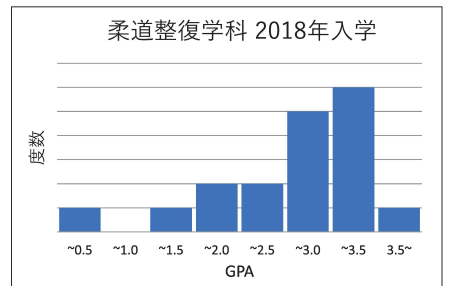
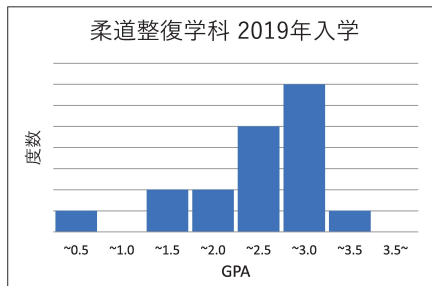
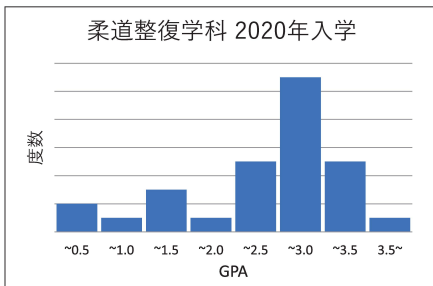
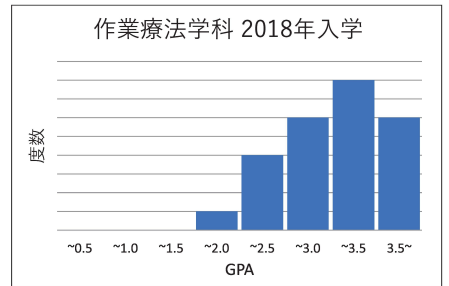
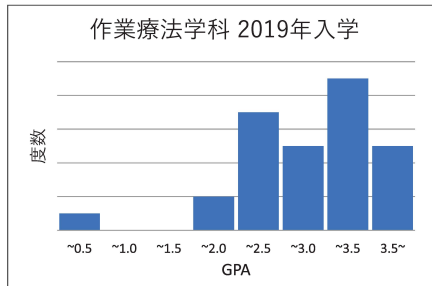
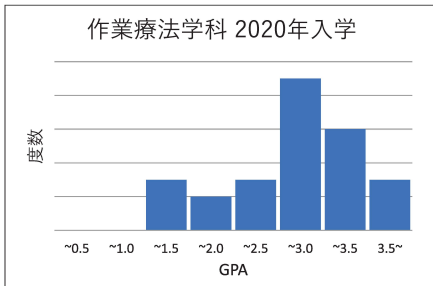
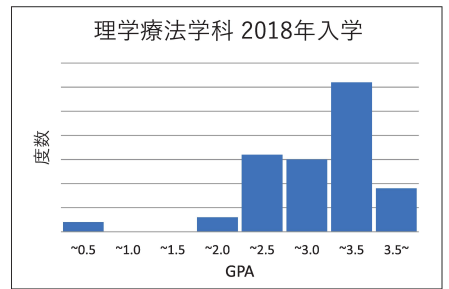
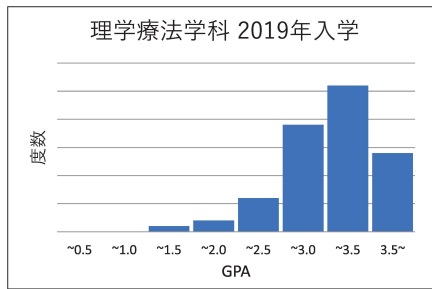
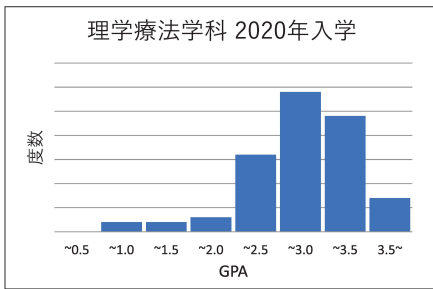
医療福祉学科については、3 学年とも成績の分布が偏っておらず全体に広がっており、達成度による成績評価が行われている様子がわかる。ただし、特に成績の低い学生が少なからず存在しており、対応が必要になってくるだろう。



理学療法学科は東京理学療法学科などと同じ傾向にあり、成績全体がやや高めである点を除いて大きな問題は認められない。

作業療法学科については、母数が少なくグラフにそれが表れているが、概ね他の学科と同じ傾向にあると考えられる。3年生の特に成績の高い学生が多い点については、成績評価の方法や基準について確認する必要がある。

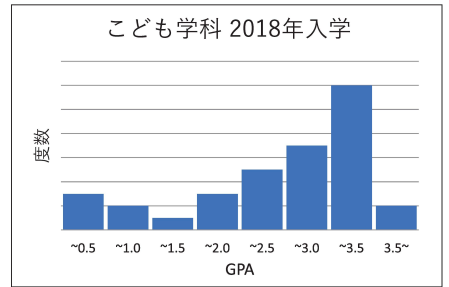
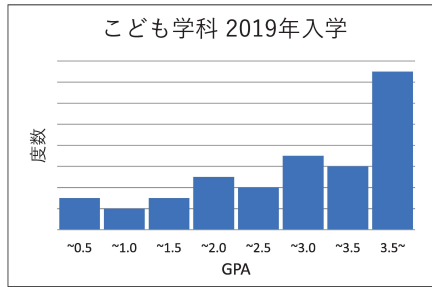
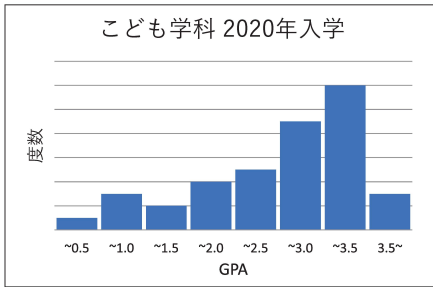
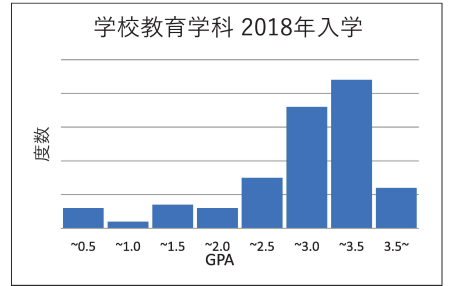
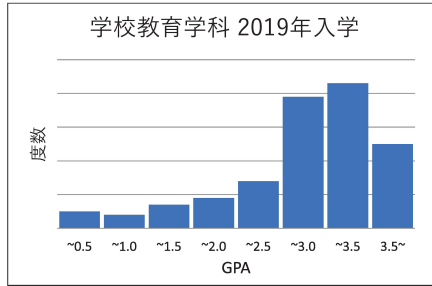
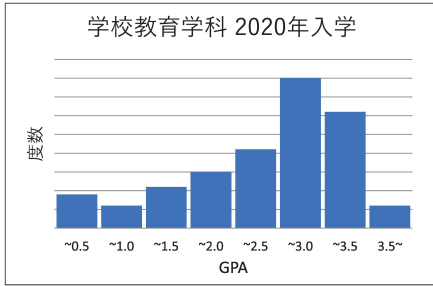
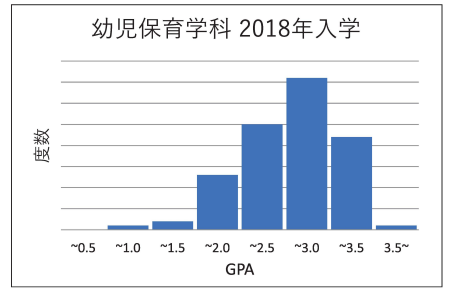
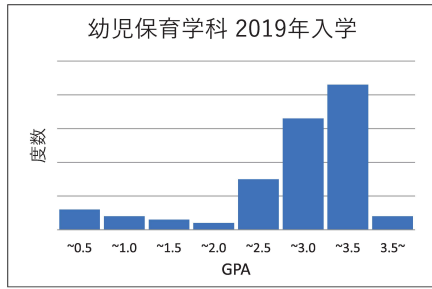
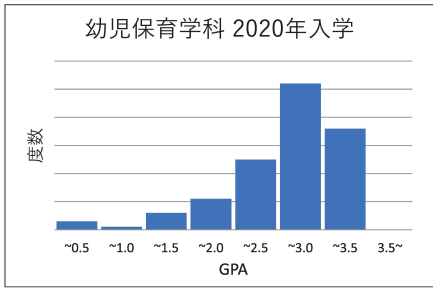
柔道整復学科については、ピークの位置は概ね妥当であると考えられる。つまり成績評価基準に大きな問題がないことが考えられる。ただし、授業放棄ないしは取得単位が少ない学生が少なからず存在する点については注意が必要と考えられる。



教育人間科学部の幼児保育学科については、2年生のヒストグラムの形が右寄りになっており、最後に大きく落ちるといった特徴的な形になっている。全体的に成績評価が甘い傾向にありつつも、一部、評価基準が厳しい科目があったというように推定できる。学科内での成績評価のバランスやレベルについては、相互に検討と調整を行っていくことも必要と考えられる。

学校教育学科については、他学科と同じ傾向があるが、特に GPA が低い学生が存在することもわかる。GPA の特に低い成績への分散は望ましいものではない。それぞれの学生が授業を履修しなかった理由については別に調査する必要がある。

最後のこども学科については、値が低いところに学生が分布しており、授業放棄及び低成績の両方の問題が存在していることが考えられる。自分自身で学修を管理することが難しい学生が少なくない可能性も考えられる。2年生の分布は特殊な形になっており、ピークが一番右にあり、それ以外が広く同じような分布になっている。成績評価が達成度を測定することよりも課題の提出率を指標にしていることも考えられる。遠隔授業における成績評価と課題提出に関するインセンティブをそれぞれ別に管理する工夫が必要と考えられる。



卒業生アンケートデータ分析

教学 IR 室 内藤可夫

アンケートの概要

新型コロナウイルスの蔓延状況が直接間接に影響し、アンケートに回答した卒業生の数が昨年より減少している。具体的には、最終年次の授業の多くが遠隔授業となったことに加え、学生の状況を把握するために多くのアンケートや調査がインターネットを通じて行われたこともあり、“アンケート疲れ”があったことが考えられる。いずれにしても、昨年度の回答結果との比較について、回答数の減少を考慮をする必要がある。回答が少なくなる場合、積極的に回答をする成績に優れた学生が多くなる傾向にあるため、解答の結果については厳しく見る必要がある。また、新型コロナウイルスの蔓延によって登校や教員との直接のコミュニケーション、課外活動などに多くの制約があり、4年間のうちの1年間ではあるが、卒業生の学生生活に対するイメージに大きな影響があったことについても読み取る必要がある。

上記のような制約を考慮して、20項目（昨年から変更なし）の全体の傾向について概観すると、それぞれの解答結果に関する傾向性については大きな変化はないものの、概ね全ての解答結果について低評価の増加と、高評価の減少が認められる。特に、施設設備に関する満足度などについては、その利用がコロナウイルスの影響で限定されたために低い数字が出ている。一方で、卒業後の進路については大きな変化が見られず、高い数字になっている点については、特に卒業生個人の人生に大きく関わる点であるので、一定の評価をすることができるだろう。ただし、いずれにしても回答数が少ないため、卒業生の全体ではより厳しい評価が推定される。

アンケート結果の分析

昨年同様、全体的な傾向としては他大学と大きく異なっているところはない。しかしながら、本学に特有の傾向性も認められるため、その点に注意しつつそれぞれの項目の傾向性について昨年度との比較において検証する。

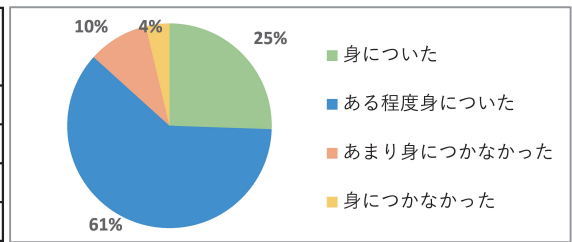
<建学の精神、教育の基本理念> (1) ~ (5)

まず、(1) 実践的判断能力、(2) 倫理的判断能力、(3) 「知情意のバランスの取れた人格」の3項目については、「身についた」つまり最も高い評価が昨年に比べて僅かに増加している。他が概ね悪い傾向にあることに比較して考えるならば、調査数が少なくなったため、学修成果に優れた学生が回答したことの結果と考えることができる。一方、(4) 「生命の尊厳、自然との共生の理解」に関しては「身についた」が僅かに減少している。評価自体は高いが、最終学年で実践的な授業が減少したことが影響しているということも考えることができる。(5) 「社会的使命の自覚」も高評価が増加しており、医療系を中心に、大学での学修が社会への貢献に力になることを認識しての結果であったというように考えることもできる。新型コロナウイルスの蔓延については、個人生活に大きな制約を与え、その点の不満が高まった一方で、社会への貢献に関する意識を高める経験になったものとも考えることができる。

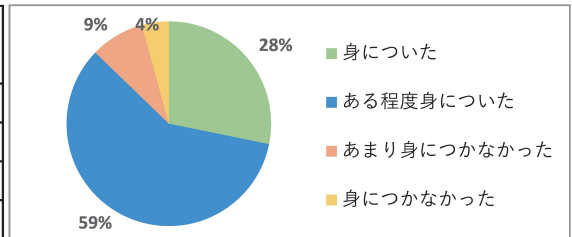
<大学教育の意義> (6) ~ (8)

次に大学教育一般の意義に関する項目の評価であるが、(6) 「広く深い教養」は増加、(7) 「卒業後、専門的知識や能力を更新する能力」、(8) 「物事を批判的・分析的に考える能力」については減少となっている。(6) については、回答者全体に教養により関心を持つ学生に絞られたためとも考えられる。一方(7)、(8) については、最終学年でゼミや卒業研究など、教員や学生間で意見を交換し議論をするような機会が得られなかったため、前年度に比較して現象が目立ったというようにも考えることができる。大学の最終学年における学修の様々な経験は特別の意義を持っており、その機会を確保することは重要であると考えられる。

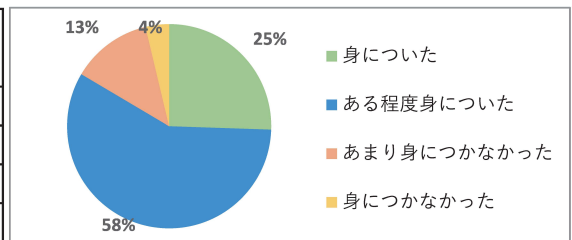
(1) 「実践的な問題解決能力」は身につきましたか？	
身についた	48
ある程度身についた	115
あまり身につかなかった	18
身につかなかった	7



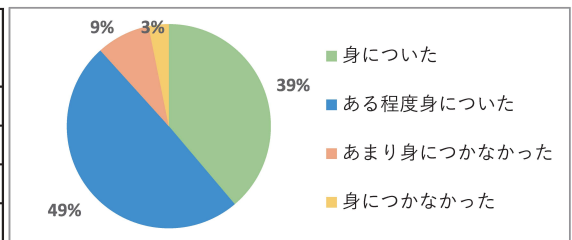
(2) 「倫理的判断能力」は身につきましたか？	
身についた	53
ある程度身についた	111
あまり身につかなかった	16
身につかなかった	8



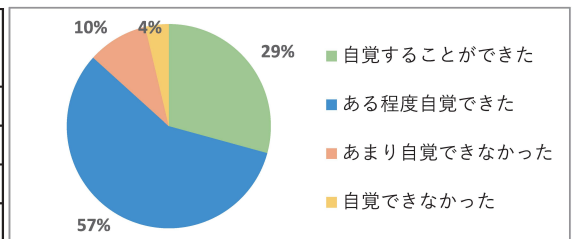
(3) 「知情意（知性と感情と意志）のバランスが取れた健全な人格」は身につきましたか？	
身についた	48
ある程度身についた	109
あまり身につかなかった	24
身につかなかった	7



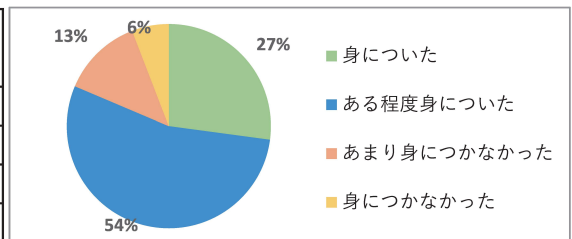
(4) 「生命の尊厳、自然との共生の意義」について理解できましたか？	
身についた	73
ある程度身についた	93
あまり身につかなかった	16
身につかなかった	6



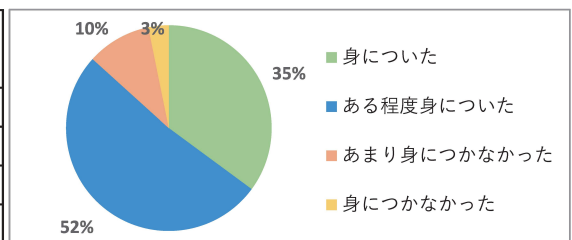
(5) 「社会的使命」について自覚することができましたか？	
自覚することができた	55
ある程度自覚できた	108
あまり自覚できなかった	18
自覚できなかった	7



(6) 「広く深い教養」は身につきましたか？	
身についた	51
ある程度身についた	102
あまり身につかなかった	24
身につかなかった	11



(7) 「卒業後、専門的知識や能力を自分で学び更新していく能力」は身につきましたか？	
身についた	66
ある程度身についた	97
あまり身につかなかった	19
身につかなかった	6

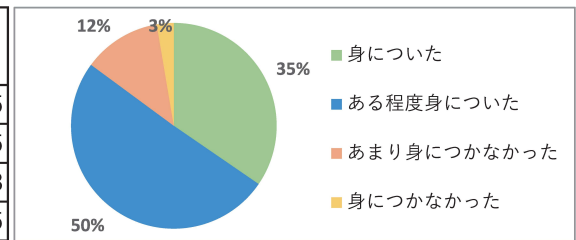


<個別具体的な能力について> (9) ~ (14)

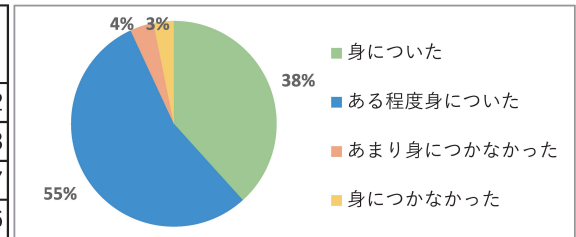
(9)「専門分野に関する知識」についてはやや減少、(10)「専門分野に関する職業能力」は「あまり身に付かなかった」が大きく増加となっている。この違いは、実習授業の減少が特定の学科のカリキュラムに影響を与えたことの結果と考えることができる。特に医療系においては、医療機関における感染抑制のため通常の実習を行うことが難しかった科目も存在する。知識に関する評価と職業能力に関する評価の違いが出てきたものと考えることができる。しかしながら、いずれにしても他の項目に比較して評価が特に高い項目であることに変わりはない。

(11)「コミュニケーション能力」はやや増加している。これは回答数が減少したことの影響と考えられる。一方(12)「プレゼンテーション能力」は数値が全体に良くなっており、遠隔授業のZoomなどの使用の経験が影響していると考えられる。授業によっては遠隔でプレゼンテーションを行うことがあったと考えられる。全般にITスキルの獲得とも関係していると考えられる。(13)「外国語能力」については、「ある程度」までの良い評価が僅かに減少しているが、「身に付かなかった」も増加しており、回答数が少なく、より優秀な学生が回答しているということを念頭におくと、良くない評価の増加と総括する必要があるだろう。外国語については、1年生から2年生に数単位までの学修を行うにとどまっており、身に付くまでのカリキュラムではないことの反映ということが出来る。他大学と比較して特別に低いということではないが、大学における外国語教育の位置付けや重さについて、あらためて検証することも必要だろう。(14)「情報活用能力」は「身についた」のみやや改善しているが、新型コロナウイルスに対応した遠隔授業の経験は、大きくは情報活用能力に結びついていなかったということになる。ただし、4年生の教育の特殊性を考慮する必要もあり、来年度以降の経年変化を確認していく必要がある。

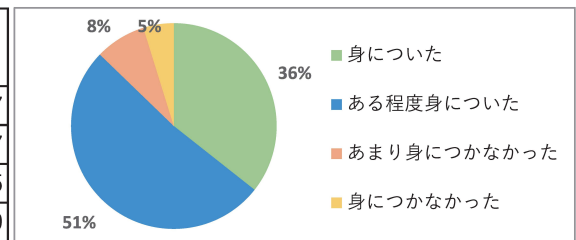
(8) 「物事を批判的に分析し考える能力」は身につきましたか？	
身についた	65
ある程度身についた	95
あまり身につかなかった	23
身につかなかった	5



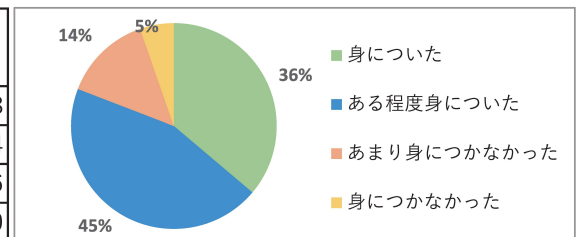
(9) 「学部・学科・コースの専門分野に関する知識と能力」は身につきましたか？	
身についた	72
ある程度身についた	103
あまり身につかなかった	7
身につかなかった	6



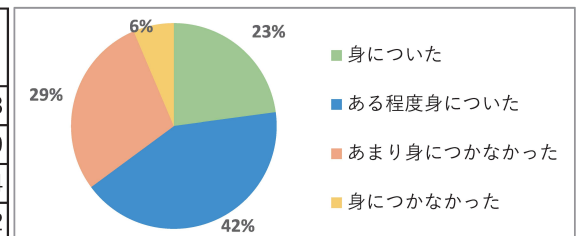
(10) 「学部・学科・コースの専門分野に関する職業能力」は身につきましたか？	
身についた	67
ある程度身についた	97
あまり身につかなかった	15
身につかなかった	9



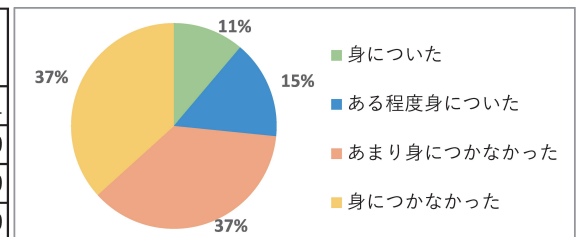
(11) 「コミュニケーション能力」は身につきましたか？	
身についた	68
ある程度身についた	84
あまり身につかなかった	26
身につかなかった	10



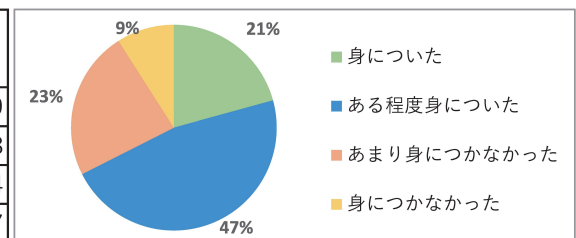
(12) 「プレゼンテーション能力」は身につきましたか？	
身についた	43
ある程度身についた	79
あまり身につかなかった	54
身につかなかった	12



(13) 「外国語能力」は身につきましたか？	
身についた	21
ある程度身についた	29
あまり身につかなかった	69
身につかなかった	69



(14) 「情報活用能力」は身につきましたか？	
身についた	39
ある程度身についた	88
あまり身につかなかった	44
身につかなかった	17



<施設設備及び教職員の対応への満足度> (15) ~ (18)

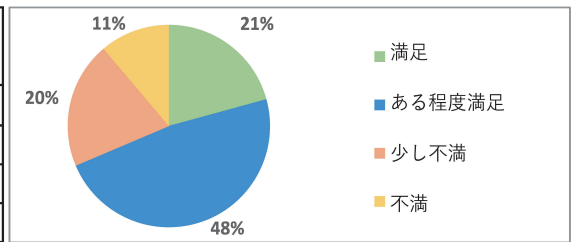
(15)「教育施設・設備への満足度」については、不満が大きく増加している。新型コロナウイルスの感染対策の影響から、最終学年で施設設備の使用が制限されたことが影響しているものと考え、やむを得ない結果といえる。ただし、悪化はやむを得ないが、改善について自由解答に具体的な指摘があったことなど反映させていくことが必要といえる。(16)「福利厚生施設の満足度」はやや満足度が減少するのに留まっている。(17)「教員の対応」は「満足」と「少し不満」がそれぞれ増加している。Zoomやメールなどによるコミュニケーションの機会が増加したため、教員のスキルや対応の差が出た可能性がある。しかしながら、大きく数値が変わっていないことを評価する必要もあるだろう。(18)「職員の対応」については、ネガティブな評価の改善が課題となっていたが、全体として改善している。回答が絞られていることの影響も考慮する必要があるが、アンケート結果への認識が改善の手がかりとなっていくものと考えられる。

<総合的評価> (19) ~ (20)

(19)「本学での学びの満足度」については、残念ながらネガティブな評価が増加しており、コロナウイルスの影響で3年間の学修を前提とした、学びの仕上げになる教育に支障が出たことの影響と考えることができる。2021年度については、より正常に近い授業の形に戻りつつあるが、今後の状況については予断を許さないものがあるため、工夫と努力を行う必要が考えられる。(20)については全体に改善しており、就職がコロナウイルスによる様々な影響を大きくは受けなかったことが反映しているものと考えられる。しかし、「不満」が増加している点にも気を付けなければならない。想定した進路にコロナウイルスの感染状況が影響をしたことが想定される。

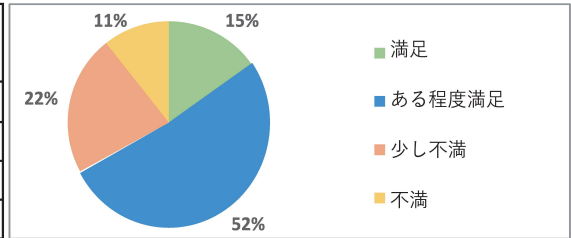
(15) 「教育設備・施設」についての満足度を教えてください。

満足	39
ある程度満足	90
少し不満	38
不満	21



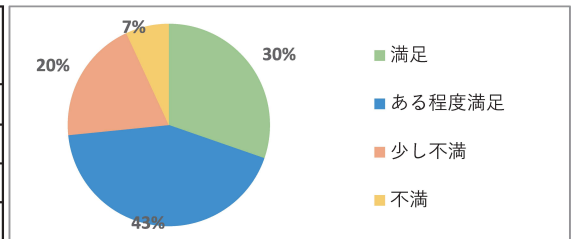
(16) 「福利厚生施設」についての満足度を教えてください。

満足	29
ある程度満足	97
少し不満	42
不満	20



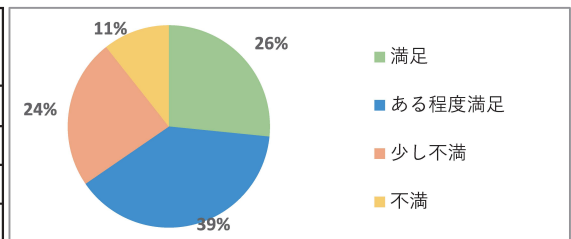
(17) 「教員の対応」についての満足度を教えてください。

満足	57
ある程度満足	81
少し不満	37
不満	13



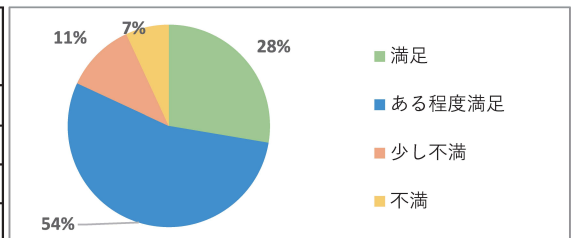
(18) 「職員の対応」についての満足度を教えてください。

満足	50
ある程度満足	73
少し不満	45
不満	20



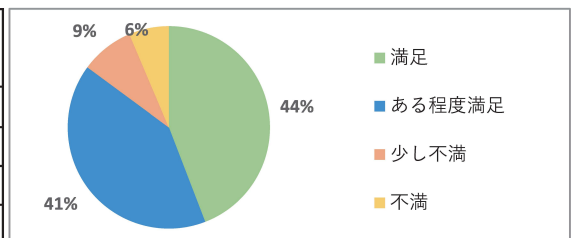
(19) 「本学での学び」についての満足度を教えてください。

満足	52
ある程度満足	102
少し不満	21
不満	13



(20) 「卒業後の進路について」についての満足度を教えてください。

満足	83
ある程度満足	77
少し不満	16
不満	12



帝京科学大学教学インスティテューショナル・リサーチ室規程

(設置)

第1条 帝京科学大学(以下「本学」という。)に教学インスティテューショナル・リサーチ室(以下「教学IR室」という。)を置く。

(目的)

第2条 教学IR室は、本学の建学の精神を踏まえた大学の基本理念を達成するため、現状の改善に繋がるような仮説のもとに調査項目を定め、学生の募集、入学、在学、卒業(退学・除籍)に至る学生の流動に関する情報等の総合的分析と分析資料の提供・助言等を行い本学の教育機能の向上を図り、教育活動の充実発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 教学IR室は、次の業務を行う。

- 一 学生の学修時間・教育の成果など教育機能に関する情報の収集・分析・提供・管理
- 二 学修環境・学生生活・課外活動、学生相談、就職など人間形成に関する情報の収集・分析・提供・管理
- 三 教員の教育面における研究活動など大学活動に関する情報の収集・分析・提供・管理
- 四 学校基本調査、学生募集等広報に関する情報の収集・分析・提供
- 五 大学の中長期計画策定に関する情報の収集・分析・提供
- 六 その他、教学IR室の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 教学IR室に、次の各号に掲げる職員を置く。

- 一 室長
- 二 室員(システム構築、分析担当)
- 三 専任事務職員
- 四 その他、学長が指名する者

(室長)

第5条 室長は、教学IR室を統括する。

- 2 室長は、学長が専任教員の中から指名する。
- 3 室長の任期は2年とする。但し再任を妨げない。

(室員)

第6条 室員は、専任教職員の中から兼務させる。

- 2 室員に、医療科学部学習支援教員を含めることができる。

(教学 IR 室運営会議)

第7条 教学 IR 室に運営会議を置く。

- 2 運営会議は、学長、副学長、学長補佐、教務部長、学生部長、学部長、学科長、総合教育センター長、教職センター長、医学教育センター長、事務局長、課長及び東京西事務室長並びに第4条に規定する教学 IR 室教職員で構成し、第3条に規定する事項を協議する。
- 3 教学 IR 室運営会議は、学長が招集し、議長は学長をもって充てる。
- 4 議長に事故ある時は、学長があらかじめ指名した者がその職務を代理する。
- 5 議長が必要と認めたときは、関係教職員を出席させ意見を聴くことができる。

(専門部会)

第8条 教学 IR 室の専門的課題に対応するため、必要に応じて専門部会を置くことができる。

- 2 専門部会に関し必要な事項は、教学 IR 運営会議が定める。

(事務)

第9条 教学 IR 室に関する事務は、事務局教務課が行う。

(雑則)

第10条 この規則に定めるもののほか、教学 IR 室に関して必要な事項は、別に定める。

附 則（帝京科教第 716 号 平成 27 年 8 月 22 日）

この規程は、平成 27 年 8 月 1 日から施行する。

附 則（帝京科総第 169 号 平成 30 年 3 月 7 日）

この規程は、平成 30 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（帝京科教第 278 号 平成 31 年 4 月 10 日）

この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（帝京科教第 364 号 令和 2 年 6 月 24 日）

この規程は、令和 2 年 4 月 1 日から施行する。

編集委員

内藤可夫、内藤隆宏、高金彰信、鉄井俊宏

帝京科学大学 IR 報告書 2020

発行日 2022 (令和 4) 年 3 月 31 日

発 行 帝京科学大学

〒 120-0045 東京都足立区千住桜木二丁目 2 番 1 号

TEL 03-6910-1010 (代) URL <https://www.ntu.ac.jp/>

編 集 帝京科学大学 教学 IR 室「IR 報告書」編集委員会

印 刷 株式会社たけまる

無断で複写・転載することを禁じます。

帝京科学大学
教学IR室

TYO UNIVERSITY